

其 十

男子うまれて富を得ずば農に歸すべし、もし劍を執らざれば筆を執るべしといふ新聞記者、社會の木鐸を以て任ずる眼より男女俱樂部の開戦を見れば、太平無事の今日、實に這個の好問題なし、都下に最も有力なる新聞は、この深辣なる記者あるがためなりとまでいはるゝ男、細君また最高女學校の出身、婉曲の筆は寧ろ良人に優るとの公評あり、

「ねエ良人、いよゝゝ始まるさうですが、どうなさいますの、社の方では全體、どういふ態度を取るんですか」

「無論、公平無私さ、營業方針から割り出せば、この機に乗じて多少の擴張策もあるが、記者としての乃公は斷じて渦中に投じ

ない、現に社主の細君も走つたやうだし、主筆の噂ア殿も幸ひ例の不平を遺憾なく爆發さして、ごたゝの最中だから、或は妙な注文が出ないにも限らないが、乃公は社會部を引纏めて立派に新聞記者たるの職責を全うする決心だ、その他いかなるところから如何なる壓迫を加へられても、あくまで乃公は公平無私だ、ついては汝、汝も乃公に關せず、別に一個の婦人として自分の意志通りにするが宜い、かういふ際、をかしく互に暖昧ぢやア却つて互の不幸だよ、さのゝ信するところに從ふの外なしだ」

「別に私、わざゝ良人に反いてまで、別に一個の婦人となつて、あの騒ぎの中へ這入りたくはありませんから、兎も角も私に對する良人の考へを、忌憚なく、言つて戴きたいんですよ」

「はゝア、良人としての乃公が、妻としての汝に對してだな、つ

まり社會舞臺の新聞記者でなく、家庭に於ける良人の資格で妻に對するんだな」

「さうです」

「さうとなれば、乃公は妻に向うて、委任した家庭以外に良人の許可を得ずして行動すべきものでないと斷定する、良人を除いて妻なるもの、存在を認めない、だから別に一個の婦人としての行動は意志の自由に任して強制しないが、しない代り既に良人は妻を去つたものとするよ」

「ですともねエ、實は私も、妻なるものを以て別に一個の婦人とは思つて居りません、或程度まで或意味に於て婦人の自由を奪はれたでなく自然に消滅した物と思つて居りますから、丸の内婦人倶楽部には寧ろ反對です、この際どういふ事があつても私は、動きません、たとひ學校時代の、お朋友と絶交しても

私は、妻として動きません」

「ひ、實際、その決心かね」

「もし丸の内へ行くとなれば、意志の自由を強制しないといふ良人を偽らずに、まゐりますよ」

「いよゝゝ動かないね、乃公の妻として」

「動きません」

「よし、わかつた、この際いよゝゝ動かないとすれば無論、かの婦人倶楽部と意見の合はない汝だ、意見の合はないのは、つまり婦人倶楽部を以て有害と認めるんだらう、社會に對し家庭に對して殆ど破壊主義のものとも見られるだらう」

「まア、さういへば、さうですねエ」

「ところで乃公も、新聞記者として社會に立ッてる以上、かういふ面白い人生の一大問題に向うて思ふ存分に活躍して見たいよ、

公平無私は公平無私だが、その公平無私は男女兩俱樂部に對してでなく、人道上の公平無私なるが故に、寧ろ實は婦人俱樂部に一大打撃を喰はしてやりたいんだ、その渦中に投じないとは、つまり汝の決心を試みたんだよ」

「ほ、私も、さうだらうと思つて居ましたの、良人の氣風として、逆も冷靜な傍觀的態度は持續し得まいと、考へて居ましたの」

「ほ、まさか、それほどでもないがね、新聞記者としては千載の一遇、實に痛快な活動が出来るんだから、たまらないよ、は、時に汝、どうだ、一番、乃公のために盡してくれないか」

「何をです」

「乃公の活動を助けてくれないか」

「どういふ方面で」

「やはり、この事でよ、しかし、こりやア汝の考へ次第だ、決して命する理由でない、嫌なら嫌で宜いが、たゞ秘密だけは守つて貰ひたい」

「あや、大變に何だか、むづかしい事ですね」

「なアに汝の覺悟さへ極れば、何でもない、キツと出来るこつた、また乃公からは、汝より外に差當つて適任者はないよ」

「ます、任重しですか」

「全くだ、今、汝は、これまでの朋友と絶交しても動かない、かまはないと、言つたね」

「いひましたよ」

「そこだ、すまないが絶交してくれ、單に新聞記者たる良人の活動を助け良人のために盡すのみでない、人道のために忍んで社

會のために家庭の破壊者を防ぐんだ、つまり間諜となつて敵の参謀本部へ入り込んで貰ひたい、所謂る反間苦肉の計だ、婦人俱樂部の最も信任さるべき特殊の會員となつて、いち／＼その秘密を漏らして貰ひたい、いち／＼その作戦計畫を探つて貰ひたい、無論、その以前、乃公は筆を極めて汝の去つた事を遺憾なく猛烈に攻撃するからね、汝は其攻撃文を侮辱の極とし唯一の證據とし乃至また手土産として駆け込ひんだ、そして我々新聞記者の態度を虚實とりませて具に密告するんだ、宜いかね、さうすれば婦人俱樂部は必ず汝を新なる好参謀として歓迎するに相違ない、加之も彼等は新聞社に對して最も神經過敏になつてゐるからね、その内幕を知るに最も便利なる新聞記者の妻は猶更ら厚遇するに相違ない、どうだ、これだけの事が出来るか、出来ないか、もし出来なければ以上一切、この戦ひの終るまで

此ま、秘密に葬つてくれ、その秘密を守つてくれるだけで、乃公は澤山だ、決して其れ以上を望まない」  
 良人は眼を光らして妻の顔を打守り、妻は眼を閉ぢて差俯き、其ま互に暫時の無言、されど無言の間は却つて互の苦心慘愴、  
 「汝は今、妻なるものを以て妻とならざる以前の婦人とは思はない、或程度まで或意味に於て婦人の自由を奪はれたでなく寧ろ自然に消滅した物と思つて、と、言つたね、願はくば汝、この際、思ひ切つて、その言葉を實地に行うてくれ、或程度と或意味は解釋の仕ように依るが、再び一個の婦人として世の中の自由に立歸らない決心の汝ならば、その生涯を託した良人の依頼は聞いてくれるだらう、もし一步を過れば永久に救ふべからざる人生の一大衝突に會する、乃公と汝の夫婦が内外相應じた活動は、必ず他日の誇りとするに足るが、どうだね」

「良人の意味は、よく了解しました、よく、わかりましたが、どうも一種の罪悪を犯すやうで、疚しい事ですねエ、なるほど婦人倶楽部の主義は悉く非認しませんが、或一部と現在の態度には全然、反対です、また妻として良人に服従する事も當然と思つて居ります、たとひ出来ない事も苦痛には感じません、しかし私は此際、もし私の十分な希望をいへば、たと動かないで居りたいんですよ、この際に動かないための絶交は甘んじて受けますが、わざわざその中へ、間隙となつて」

「新聞記者の妻になつた、不運とても諦めて、やれないか」

また暫時其まゝの無言に差俯きしが、やがて振上げし顔に決心の色、かゝる時の女は男よりも強し、

「やりませう」

「やる、やつてくれるか」

「やりませう、やらなければならぬ私と覺悟しました、やりませうが良人、成敗の奈何に拘はらず私は、これがため、死にますよ」

「えッ」

「まさか刃物で殺されも仕合せいが、精神的に自殺しなければなりません」

「なぜ、何故だ」

「良人は他日、夫婦の内外相應じて働いた事を誇るに足ると、思つて居らつしやるが、そりやア新聞記者としての良人だけです、良人に服従して首尾よく效を奏した妻にもせよ、また人道のため社會のために幾分を盡した私にもせよ、やはり私は女です、女として私の取つた行動は味方からも決して譽めらるべきものではありません、まして敵からは猶更の事、所謂獅子身中の

蟲で、油断の脚下へ伏せて置く爆裂弾ですもの、實に恐るべく憎むべき私ですよ、喜んで迎へられ深く信じて許されるだけ、それだけ容易に秘密を探り得ますが、また一面それだけ同性を欺き同性を賣るの罪は重い筈ですからねエ、どうしても最後は精神的の自殺をせねばなりません」

良人は今更ら思はず腕を組んで眉を蹙めながら、聊か躊躇の顔色、されど妻は決心の色いよゝ堅し、

「いふまでもなく良人、やる以上、どうせ、これくらゐの事は覺悟しなければなりません、覺悟したとなれば私、もはや一身を賭して居ますから必ず、さつと、やり遂げます、いづれにしても再び世間へ顔を出さない私ですから、その私が婦人倶楽部へ駈け込んだ時は良人、あらんかぎりの筆を極めて、あらんかぎりの恨みと怒りを盡して、この私を遺憾なく完膚なく筆誅して

下さいよ、もし萬一その筆に疑はしい點があれば、無効ですよ、折角の苦心惨憺も水泡に歸するか知れませぬよ、私をして此事に成功さすも失敗さすも第一歩は良人の筆にありますからねエ」

「よし、乃公も、その覺悟で掛らう、良人のために自己を空にするもの、これを貞節の妻といへば、昔と違つて今日の時勢に應じた貞女は、實に汝だ、感謝するぜ」

織田信長に於ける妙光禪尼に拍手喝采せし婦人倶楽部は、その鬼神も知らざりし大膽なるところを以て外に向はむとせしが、この怖ろしきものを却つて外より逆に受けたり、

其十一

今人の師にも就かず先輩にも學ばず、古人の糟粕も嘗めず参考も取らず、筆は天地の自然に化し心は宇宙の絶待に接し、森羅万象を直に捉へ來りて所謂の畫神の秘命をうけたるもの、古今東西の美術界に新なる一大紀元を起すべき責任ありとは、世間いまだ承知せざれど本人みづからの自畫自贊、

されど美術家は美術家なり、この美術家の細君また婦人倶楽部の會員とは、運命の弄びし夫婦の配合、あまりに殘酷ならずや、六疊の一室を廣大無邊の天地として、梓に張れる尺三の絹を大善美の宿るべきところと心得、日蔭の靑瓢簞に等しく人間の血色なき面を傾け手を伸ばして、將に神來の筆を下さむとする一刹那、

さりとはは良人の天職に心なき不似合の細君、その背後より蓄音器の如き聲、

「ねエ良人、ちよいと良人」

固より振返る筈なく、畫絹に眼を注いで筆を宙に浮べしまゝの舌鼓、細君なほ去らず、

「良人、良人ッてば」

良人は二度目の舌鼓、細君ますく痾走りし聲、

「用があるンですよ」

「うるねえ」

「うるさくツても良人、用があるンですから」

「後で聞く」

「後では困ります」

「見えないか」

「何がです」  
「ちよッ、これが見えないか、今、筆を下しかけてるぢやアないか」

「盲目でないから見えて居ますよ、見えて居ますが良人、此方に  
見て居れない事がありますからさ」

「其方の事は知らない」

「知らないで済みますか」

「済んでも済まなくッても今ア、いけない」

「いけない」

「いけないとも、將に乃公の筆が何物かに同化センとしつゝある  
ところだ、いけない」

「あや、いけないで米屋が無事に歸りますか、今日は臺所で居坐  
ッてますよ」

「俗悪な奴だな、勝手に居坐らして置け」

「さうは良人、いつまで勝手に居坐ッて居ませんよ、何とか仕て  
やらなければ」

「居坐ッて居れなきやア歸るが宜い、米鹽のために乃公の筆が止  
められるかい」

「乃公の筆、乃公の筆ッて良人、それを描き上げて幾何になるン  
です、夫婦たッた二人が米屋に居催促をうけて、乃公の筆もあ  
りますか」

「現在の賤しい金銭上で論じられる乃公の筆でない、他日の不換  
金だ、國寶になるべきもんだ」

「他日より現在の不換金が困りますよ、もう今日は私、言譯が出  
来ませんから良人、出て下さい」

「馬鹿ッ、物質上に關して居れるから」

「私も、かう貧乏世帯の言譯ばかりに關して居れませんからね、是非とも良人、良人」

たゞさへ口も手も八丁の細君、ぐいと其袖を引けば、五六度も墨を合せて思案の宙に浮べし穂長の畫筆より、ぼたくと眞ッ白な絹の上に眞ッ黒な三四滴、おまけに入らざる筆力あまりて斜に一本、すつと餘計なもので太く引いたり、や、怒るまい事か神來の畫伯、我を忘れし憤怒は其まゝの腕鐵砲となりて、づどんと後方へ一發、生憎細君の顔の中央、きやつと叫ぶや否、鼻血を出して武者振付けば、筆も絹も硯も繪具皿も四方へ飛んで、めちやくの大騒動、臺所に居坐りし米屋の中小僧、驚いて一散に逃げ出しぬ、

「さア良人、さア私を良人どうでもして下さい」

「此女、けしからんぞ此女、苟も美術家の妻として、やア痛い、

痛い痛い、こら放せ、放さないかッ」

「放して堪りますか」

「乃公が堪らん放せ、放してくれッ」

いつまでも仲裁の來ぬ夫婦喧嘩、やうく左右へ離れしが、腕力は逆も叶はぬ美術家、ますく青くなりて眼ばかり光らせながら、はつくと苦しげの息を吐けば、手を引いても口を引かぬ細君、袂の紙に鼻血を押へて猶更の勢ひ、

「私を良人、かういふ酷い目に逢はして宜いんですか」

「どツちが酷い目に逢った、これ見ろ、折角の絹が、こんなにな

ッたぞ」

「絹ぐらゐ何です、一枚の絹と妻とを換へられますか、絹の上の墨と私の鼻血と比較になりますか、大體、さういふ良人の間違つた料簡だから、わづか五圓か六圓の事に居催促を食ッて、こ

ンな事になるンです、つまり良人のやうな人は獨身に限りませよ、妻を持つ以上、一家といふ事を考へずに済みませかね、一家も一家、夫婦たゞ二人が殆ど世間と交際のない一家をさへ満足に支へる事の出来ない良人は、やはり獨身の下宿屋住居か、用のない寺の座敷でも借りて自炊なさるのが分相應です、かりにも家を持ち妻を持つといふ資格はありませンよ」

「あゝ困った女だな、汝は美術家といふものを知らないから困るよ、そもく美術家といふものは」

「その良人、そもくを止して下さい、それを聞くと私、頭腦が痛くなるンです、どれほど良人、そもくを振廻しても世の中の實際は良人、そもく位で自由にはなりませんよ、誰が良人の、そもくに驚くもンですか、私、そもくは大嫌ひ」

「いや、なるほど、考へて見ると無理はない、今日の識者とか具

眼者とかいふ人間でさへ、徒らに輪廓の技巧と色彩の匠氣に眩惑して、あはれむべし、まだ乃公の畫を知らないンだからなア、いくら妻でも女としては汝が乃公を知り得る筈がない、また美術家といふものは現在の眼前に知らるゝを以て、さらに誇りとすべきもンでないよ」

「はゝゝ、私、畫は知らないにしても、よく良人だけを知って居ますさ」

「乃公を知ってる、どう知ってる」

「良人は嘘吐き」

「嘘吐きだ、いつ乃公が嘘を吐いた、俗世界の俗物どもは常に絶えず利益のために人を欺いて嘘を吐くが、只これ眞美最善を希うて一切の物質的に何等の價値も認めない乃公は、いかなる場合も嘘を吐く必要がない、どういふ嘘を吐いた」

「よくまア良人、そんな事が、いはれますねエ、それが何より第一、嘘吐きの證據ですよ、現在あれほど大きな嘘を吐いて居ながら、馬鹿馬鹿しい、真美も最善もありませうかね」

「こら、あ」

「こらあ、どこですか、こゝでこそ私、私の方から立派に、そもくを出しますよ、そもく良人、私を妻とするに就て、どういふ新聞廣告を出したか、覚えて居なさるでせう、年齢二十七美術家月収百圓以上、實は私も始めて逢った時、變だとは思ひましたがね、まだ今よりも良人の風俗が多少、見よくつて、あまり下等でもない素人家の二階借ですから、寧ろ新に一家を持つといふ點に希望を抱いたのが大間違ひ、さア一家を構へた後は良人、どうです、月収が百圓以上、まア呆れた事、せめて以下とあればですが、ほゝゝありやア月収でなく年収なんで

せう、自分が生涯の妻を娶るにも始めから大膽に、あんな嘘を吐く良人なもの、この私に向つては生涯を欺いて居ますよ、私は欺かれて良人の妻となつたんですよ」

「さう汝、さう、いはなくつても宜からう」

「今までの私なら此まゝ生涯、馬鹿にせられて居るかも知れませんが、此ごろの私としては」

「ふひん、今までと此ごろと、違つてるのか」

「違つてますとも、つまり今までは良人に欺かれて良人に囚はれた私ですが、此ごろは妻といふ名稱よりも婦人といふ事に自覺したからです、聞いたところから明るところへ出たからです、罪を犯して自由を奪はれた監獄でも空気の流通と日光の工合に注意の行届いた今日、誰が社會と没交渉の此うす聞いた一種の座敷牢に生涯を埋めて置けるモンですか」

「や、汝、出る氣か」  
 「もし私が欺されて良人の妻になつた最初を、あるところへ告白すれば良人、たゞ私が無事に出ただけでは済みませんよ、大變なこつてすよ」

こゝまで手強く無遠慮に押込まれても、まだ婦人倶楽部とは氣の付かぬ美術家先生、頻に小首を捻りて眉を顰めながら不思議の顔色、いかにも門外の事情に疎く社會に遠かりて、人間放れのせしところあり、  
 これで結局こゝも夫婦の泣き別れ、いや良人は現在の悲哀に泣けど妻は不運を免れし微笑を含んで、

其十二

いたるところ四方に生活難の悲鳴を聞く今日、兎も角も生活に重きを置かずして、それ以外に何等かの仕事を持てる當世男十餘人、此ごろ相集まれば必ず婦人倶楽部を談話の随一として、いづれも既に多少の手負となりし無念骨髓の連中、

「どうだい君の方は、どこの家庭も怪しい風が吹いて雲行の面白くない時だから、當分互に差控へて居るが、その後は相變らず奥方、ますく御機嫌よく入らせられるかね」  
 「なかく御機嫌よく入らせられない、まだ御動座はないが頗る不穩の状況を呈してるからね、残念ながら君、まるで腫物に觸るやうだ」

「しかし困ったね、めい／＼何とか仕なきやアなるまい、いつまで此ま／＼ちやア安心が出来ないせ」

「ところが、うツかり何とか仕られないよ、する以上、呟き出す覺悟がなくツちやア無効だ」

「呟き出せば宜いぢやアないか、入れたものを出すに何の遠慮があるもんか、腫物に觸るやうな氣だから、ます／＼圖に乗って仕末に困るんだ、觸らずに捻ぢ伏せたま／＼を潰してやれよ」

「は／＼、さういふ君は全體、どうだい、一週間も前に京阪へ旅行して不在中の君が二三日以前、例のを連れて上野の宵間に池の端の散歩といふ洒落たところを、だしぬけの不意に見付けられたさうだね、は／＼、どうした、どうなつたね、別して此際だ、参考のため是非とも聞いて置きたいよ」

「や、さう朋友にまで普く知れ渡つた上は、もはや具に白状する

がね、驚いたよ、驚いたね、今までと違つて、細君猛烈の折柄だ、猶更ら以て驚かざるを得ないよ、は／＼、實際、商用で京阪へ出かけた事は出かけたが、案外早く濟んで一週間の豫定に三日を餘したのが禍ひの基だ、この機を逸すべからずと最大急行で新橋へ着いた時、どうも怪しい、あとで考へると、あの時に誰か御注進した不埒者があつたらしいね、無論、女さ、まさか男で返り忠をする奴はなからう」

「は／＼ア、そりやア堪らない、新橋へ着いた時、はや既に露現した理由だね」

「どうも、さうらしいね、お互に油断のならない世の中だせ、さうでなくツて僕、御臺所が、あの時分あの池の端を通る筈がない、もう君、十時を過ぎてたよ、つまり穴まで御詮議が届いて居たから出るのを待ち受けて、八時頃から後を躡けられたんだ

ね、神ならぬ身の」

「やれ〜念が這入ったね、わけて君の御臺所は音に聞えた名高いもんだ、世間普通の嫉妬家でないから二本の角も真ッ直に生えず、くしゃ〜横に枝が出て鹿の角だといふくらゐの評判だぜ、さぞ手厳しかつたらうなア、お察しする、同情するよ」

「いくら察して貰っても同情して貰っても、あッ付かないよ、加之も例のは見た事がなし僕は近眼と來てるだらう、おまけに宵闇の星明りだ、大體に最初から運が悪いよ、ばったり顔と顔が出ッ食はすまで知らなかつたとは、なさけないね、おや良人、やア汝、雙方その場は以上これッきり、これッきりの幕で別れたから君、ます〜堪らない、本舞臺が後に残ってるよ」

「どうした、すぐに歸つたかね」

「もう自棄だ、毒皿主義で昨夜まで二日、ブン流しの鬻勇を振ッ

た」

「は〜、鬻勇の後の情氣方が面白かつたね、眼に見るやうだ、

は〜、〜」

「面白いどころか、いやはや、お談話にならない、たゞの會員と違ッて近ごろ婦人倶楽部へ臍線金を五百圓も、寄附したといふ凄じい勢ひだからね、驚天動地、なま優しい責苦ぢやアないよ、怖ろしいもんだね、あゝなると君、逆も人間の女として向へないぜ、まして自分の妻とは猶更ら思へない、まるで悪鬼羅刹の形相だ、加之も僕のは出て行くと言はない、婦人の權能を無視し婦人の神聖を侮辱したと、良人を捨て、出て行くのは君よほど手軽い部だぜ、僕の細君さらに頑として動かないね、どツかと坐して宜はく、今度の戦さに一萬圓を寄附して下されば堪忍するといふ高壓的だ、その堪忍も君、過去に於ての堪忍だぜ、

「今までの事だけは許してやるといふ意味の一萬圓だ、これから後は將來また改めて罰金を仰せ付けられる理由だが、どうだい、どっちが侮辱されてるね」

「や、まさかと思つたが、そこまで来れば我々も此まゝぢやア居れない、朋友一人のためでなく、天下のためだ、一場の坐談でなく、本氣の沙汰で起たう、無論、君、一萬圓の馬鹿ア盡すまいね」

「知れたこつたよ、一萬圓は倍置いて、嗅アが臍線金の五百圓を逆に取戻す決心だ」

「面白い、面白い、いくら入費が掛つても面白い、無資産の妻なるものが、良人の財産を良人の意志に反したところへ一言の相談なく許可なく、自由に送つた金の取戻し訴訟だ、まけても構はない、やるべし、やるべし、面白い、面白い」

「その一面また我々、あらんかぎりの知己朋友を集めて、どうだ、出来得るだけの金を男子倶楽部の輻重部へ送らうぢやアないか」

「愉快、愉快」

「我々が知つてただけの顔を説き廻つて一個年間の交際費を集めても、尠くないぜ」

「もし足らなきやア身を以て任ずるの覺悟で、おのゝ志願兵に出るンだよ」

「しかし家で嗅アと衝突して、また運わるく戦場で二重の衝突は聊か閉口だな、少々まゐるせ」

「なアに君、敵となれば嗅アも何もあつたもんか、それこそ所謂の大義は親を滅すべしだ、寧ろ平生の思ひ知つたかといふ勢ひで、ぎゆう／＼いはしてやるのさ、他人でないだけ、猶更ら憎

「實は可愛さ餘ッてかね」

「あゝ、諸君、此奴、いかんよ、この際かういふ弱音を吐く奴だから、いざとなれば最も厳格な監視の必要があるせ、どうも此奴、先刻から黙ッて居たよ」

「そりやア君、養子だよ」

「は、ア養子か、去り状を書いて自分が追ひ出される方だね」

「いや、たとひ養子でも僕は決して唄アのために追ひ出さるべき養子でない」

「どういふ養子だ」

「夫婦養子」

「うまゝく逃げたぞ、兎も角も差當ッて即座の罰金、百圓を申し付けろ」

「賛成、賛成」

「多数決、多数決」

「百圓は酷いよ諸君、半分半分、五十圓」

「いけないぞ」

「吝な養子根性を出すな」

「あとの五十圓は唄アに相談する心算か」

どツと一時に笑ひながら、どや／＼と四方より取圍んで、互に知り合の悪戯半分なれど金は實際の徴収、ポッケットより持ち合はせの小遣七十一圓、五十三錢の端錢まで巻きあげて、その日の晩餐會に再び婦人倶楽部を攻撃の大氣焔、

其十三

老いて元氣ますく盛に、世の中へ飛び出す當世流の老爺あれど、これは退いて自己を知る老後の計、幸ひ取り外さず思ひ通りの樂隠居、

「婆アさん、芝の娘は遅いね、まだ来ないのか、何を仕てるんだらう、今朝ア早く来いと言つてやつたに、どうも此ごろの若いものは老人を馬鹿にして、いけないよ、つまらない自分の勝手な事には、きやツ」と火事で逃げ出すやうに騒ぎながら」

「さうばかりでもありませんよ、何か手の放されない急用でも出来たんでせう」

「急用は乃公の方だよ、急用だから来いと、前夜わざ／＼使ひを

遣つて置いたに今朝まだ来ない」

「今に来ますよ、閑暇な身體で待つて居ると、思ひの外に長いものさ」

「大體、何だね婆アさん、あれも尋常で止めて置けば宜かつたに、つい出来るとか惜しいとか世間に嘲されたもんだから、うかうか難しい女學校を卒業させて仕舞つて、とんでもない事をしたね、商賣人の嫁には餘計な學問を、させ過ぎたよ」

「今更そんな事を、ほ／＼、悪い事を、させ過ぎたんでもありませんまいよ、ほ／＼」

「いや、今となつて見ると、あまり善くない事を、させ過ぎたんだよ、二人の兄は男でも商賣一途の正直で氣の優しいもんだが、末に生れた娘は、どうも女に似合はず氣が強くて我まゝで困る、第一に婆アさん、汝が甘く育てたんだせ」

「おや、今度は私の方へ矢が立って来ましたね」  
折しも門口へ俵の楯棒を卸せし音、老爺それと耳を敬て、婆を顧み、

「婆アさん、あれだ、銭が安くって便利で早い電車といふ結構なものがあるに、わざ／＼高い銭で、俵を飛ばして来るんだからね、」

「どうせ他人に嫁ったもんだから、俵ぐらゐ宜いぢやアありませんか、そんな叱言は、お止しなさいよ」

門口に帳場俵を待たせて、ズツと入り来りしは、なるほど店賣商人の妻として案外の晴がましい大ハイカラに金縁眼鏡、色白優形の年輩二十三四、華奢を誇りし流行の衣裳風俗、まさか常著でもなければ、これが第一の粧飾でもなし、

「お父さん、今日は、おッ母さん過日は有難う、あれで私、ドン

なに便利を得ましたか」

「婆アさん、また汝、何か内證で送ったんだね、嫁に遣った家へ物を送るには氣を付けなさいよ、却って先方へ善くないから」

「なアに良人、これがね、小さい時に著た友禪の長襦袢がありましたから、ねエ、また使ひ途があるだらうと思つて」

「そりやア、どうでも宜い、宜いが婆アさん、乃公は今日、これに改めて談話があるからね、談話の濟むまで暫時、そつちへ往つて居なさい、ぐづ／＼横合から口を出しちやア面倒だ」

無理に婆を追ひ退けて、じろ／＼今更ら我子の顔を打守りし老爺、苦蟲を噛み潰せしが如し、

「大變に待つて居たせ、遅かつたね」

「いえ、ちよいと丸の内へ用があつて、寄りましたからね、つい遅くなりまして、しかし何の御用ですの、前夜、わざ／＼お使

ひで」

「丸の内は何だ、丸の内に親類も何もありません、なかつた筈だが」

「ほい、親類がなくつても、用はありますよ」

「どういふ用だ」

「お父さんの、聞かなくつても宜い用ですよ」

「いや、丸の内といへば是非とも聞く、丸の内の、どこへ寄つた、何といふ人の家だ」

「困りますねエ、お父さんが何も、そんな事を」

「は、ア、親が呼びにやつた用よりも大切に、親にもいへないところへ寄つたのかね」

「オア、お父さん、今日は、どうなさいましたの」

「どうも仕ない、いくら年は取つても乃公は乃公で、どうも仕な

い、しかし汝は近ごろ、どうか仕ては居ないか、尋常ぢやアなからう」

「何のこつてす」

「丸の内に、婦人倶楽部とかいふ、料簡の間違つた馬鹿な氣狂ひ女の、寄合場所があると聞いたが、そこへ寄つたんだらう、どうだ」

「あ、わかりました、それで今日、わざわざ私を、お呼びなすつたんですね、道理で先刻から、をかしく變だと思つて居ましたよ、なるほど、始めて分りました、お父さん、良人が何か、お父さんへ内々で頼んだのでせう、ほい、自分の妻を自分の人格上で、どうにも出来ない人ですからねエ、また出来るだけの事は仕て居ませんよ、實は、お父さん、私の方から御相談したいと思つてる事が」

「な、何だと、も一度、言ッて見ろ、自分の妻を自分でどうも出来ない、出来るだけの事を仕て居ない、全體そりやア何といふ事をいふんだ、その日を暮らし兼ねて夜通げをしたり首を縊ッたりする人間のある世の中に、飢ゑず凍えず無事に三度の御飯を食はしてくれる亭主が、どこに不足ある、第一その立派な風俗は誰が作ッてくれたんだ、眼も悪くないに金縁の眼鏡を掛けて、乃公なんか名も知らない當世流行の衣裳で、びか／＼光る指輪を指ッして、前か後か急に判断の付かないやうな大きな束髪で、商賣人の嫁には見ただけでも入らざる贅澤を並べて、さうさ亭主を弱らした證據だ、あゝいふ氣の好い亭主なればこそ、汝のやうな我まゝものを今まで文句もいはずに持ッてくれるんだぞ、少しの本を讀んだり字の書ける事が、どれほど亭主を助けて家のためになッてるんだ、それを有難いとも思はず、出来

るだけの事を仕てくれないとは何だ、まだ其上それで飽き足らず、馬鹿にも事を缺いて丸の内へ亭主を粗末にする相談しに行くとは、あきれ返ッて物も言はれない女だ、今日といふ今日、乃公が汝の亭主に濟まないから、あらためて汝を謝罪に連れて行くんだ」

「お父さん、外の事と違ッて、いやしくも私の一身に關する事です、生涯に關する事です」

「私の一身に關する事だ、汝の一身に關する事を他人でもない現在の親と亭主が差圖するに、ふしぎはあるかい、凡そ物の間違ひにも思ひ切ッて大膽に間違ッた女だ」

「いえ間違ッては居りません」

「間違ッて居ない」

「はい、決して間違ひません、親と子の間は兎も角、良人と妻の

間は、お父さん、さういふもんぢやア御坐いませんよ、なるほど犠牲を以て婦人に強ひた野蠻時代の舊思想からいへば、妻を良人の占領物と見るかも知れませんが、人類の向上した今日、良人は妻の使役物でないと共に妻も良人の使役物でなく、つまり雙方の合意的になつたもので、いづれか一方に要求の満足しない點があれば、何時でも立派に正當に差支なく離婚の出来るものです、お父さんが私を今の家へ嫁にやる時は、まさか前途に我子の不幸を祈つた理由でも御坐いますまいが、今の私としては最も人生に不幸なる妻となつて居りますよ、お父さんは只物質上ばかりを見て、私を舊式の女大學流で、お叱りなさいますが、人はパンのみで生きて居れません、衣食住以外に生命の慰安といふものがなくては折角の存在も、あはれむべき無意味に終りますからねエ」

「さア其、女として、嫁として、その終り場所が外にあるかい、亭主の家が現世で安樂往生の終り場所だぞ」

「困りましたねエ、お父さん、私のいふ事が、さッぱり」

「こら、自分の生んだ我子のいふ事が親として分らない道理があるか、さういふ不孝な事を勿體ないとも思はず平氣でいふ女だ、親に不孝なものは必ず亭主にも不貞女に極つてる」

「それですよ、お父さん、貞女とか、不貞女とかいふのは、男女を先天的の主従と見た論で、良人のために身を賣つて譽められた時代の産物ですから今日は零ですよ」

「いち／＼生意氣な事ばかり吐すよ、どこから理窟を持つて來ても、親と亭主に逆うて善いといふ道理があるか、全體まア、あの亭主に何が不足あつて、さういふ濟まない事をいふんだ」

「これを委しく廻れば、お父さん、どうしても世間一般の父兄に

論及しなければなりませんから、たゞ簡単に結果だけ、實は、お父さん、あの良人と私と趣味が全然、違つて居ります、大體の性質が、まるで正反對です、つまり夫婦になつたのが人生不幸の最大原因で、いはゞ雙方ともに絶えず心の平和を破壊されて居るんです」

「もう宜い、そんな講釋、いくら聞いても饒舌つても無効だ、一且、嫁に遣つた以上、さういふ我まゝは亭主よりも世間よりも第一この乃公が承知しない、とんでもない奴だ、二人の兄の嫁を見ろ、あけても暮れても神妙に感心なものだせ、他人から来た、あの嫁達に對しても乃公が恥かし」

「お父さんは全く、頑固だからねエ」

「頑固でも何でも道理に二つがあるか」

「道理に二つはありませぬよ、ありませぬがね、その道理も時代

の要求で、つまり進歩すれば進歩するに従ひ自然に根柢も解釋も違つて來ますよ、よく分るやうに早い例を取りませう、お父さんの若い時、もし何十里何百里を隔て、針金一本で談話が自由に出來るといへば、逆も眞實になさいますまい、これが今、無線電話の世の中です、また人間は地の上を歩くものとして、空を飛ぶのは晝に描いた仙人が天女ばかりでせう、それが現在飛行機で自由に飛んで居ます、これと同じ道理で、お父さんが昔、いくら悪い事だと思つて居らしても、ずつと進んだ今日の頭脳で見れば、却つて反對に善い事となつて居る理由もあるんですよ、ですから強ち私を不孝だの不貞女だのと、さう一概にはなりませぬ」

「もう乃公は、汝のやうな奴に物をいはない、どうなと勝手にしろ、すきな眞似をしる、その代り萬一、うろたへて泣いて來て

も今後、決して家へ入れないぞ、さう思へ」

「まア、お父さん、あんまりです事、それぢやア、あまり酷ですワ、うろたへて泣いて来るやうな事は御坐いませんが、また改めて御相談に」

「相談うけない、第一、親に向ッて相談といふ事があるか、相談とは同じ身分の人と人が話し合ッて事を極めるんだ、子から親に向ッても女房から亭主に向ッても、お願ひ申しますとか伺ひますとか何とか、いふもんだ、今の若い奴等ア言葉使ひも知らないくせに何を知ッてるい、たゞ人を馬鹿にする事ばかり達者に修行しやアがッて」

「お父さんは今日、怒ッて居らッしやるから無効ですワ」

「これが喜んで居れるかい」

「いゝえ、怒ッて居らしては理解力も判断力も自然に、薄くなッ

て、物事の道理が」

「たゞ黙れ、此女、いつまで屁理窟を捏ね廻すんだ、くだらない口数の多い奴に限ッて、ろくなもんはないぞ、今に後悔して食ふ事も出来ず、べそく泣いて来るのを眼に見るやうだ、とんでもない娘を持つたよ、まさか嫁に遣る時、かうでもなかつたに、あゝ濟まない、氣の毒なものを遣つた、いッそ小さい時分、くりくり坊主の尻にでもすりやア宜かつた」

「ほゝゝゝ」

「おや、笑ッたな、親の涙が呵しいか」

「だッて、お父さん、くりくり坊主の尻は随分です事、ほゝ、ほ、尻さん、ほゝゝ」

「笑へ、笑へ、それほど呵しけりやア、いくらなと笑へ、笑ッてるのも今のうちだ」

「私、逆も叶ひませんワ、おツ母さん、ちよいと出て下さい、おツ母さん出て下さいよ」

「婆アさん、出ると承知しないぞ、第一また出られまい、こんなものを生んで今この場合、のそく乃公の前へ出られるかい、これの亭主に乃公が申譯ないのと同じこつた、乃公が出るといふまで出る事ならない、これから二人の兄を呼んで来て親子兄妹、揃つた上で、あらためて、いふ事がある」

いたるところ新舊の衝突、多少その間に忍び合ひし事も、婦人俱樂部の勃興以來、俄の無遠慮、俄の破裂、一時に大池の水門を開きしが如し、

其十四

蓬髮弊衣、悲歌慷慨、易水の寒きを以て快を呼びしもの、今日の時勢に後れて金が物いふ世の中の落伍者となり、政黨の騒動にも捧大のステッキその效用を失ひし壯士二人、下宿屋の二階に質草の矢種も盡きて、過ぎし紅燈緑酒を夢に今は寢覺の膝小僧を抱き寝の境涯、これが身代を振ひし最後の奢りに正宗の四合瓶と二枚の焼鯛を噛りながら、

「おい君、いよ／＼これが落城の水盃だせ」

「いたるところ、かう下宿屋の追ッ拂ひを食ツちやア堪らないなア」

「今更ら悔いて及ばないが、考へて見ると、お互に人生の首途を

間違ッて出たよ、やはり人間は何の奇もなく快もなく、鼻ッ垂れ送りに順を逐ッた奴が勝を占めるね」

「全くだ、吹けば飛ぶやうな奴が案外、うき世の風にも吹き飛ばされず、紳士とか何とか吐して押廻る今日この我々は、どうだ、なけなしの財布を叩いた瓶詰の冷酒で二枚十銭の錫を嚙ッて、あはれなる哉、もう天下の談論風發でもあるまいよ、宿昔青雲の志は泥溝板と共に踏み外して仕舞ッた、は、は、は、」

「仕方がない、運を取り損ッた後の祭禮だ、働くにしても働かぬ場處と時代が悪かつたよ、我々以前の壯士は意氣相投じた知己のために怒髪帽子を突貫いたもんだが、お互の頃は既に政黨腐敗の極で、ぐるぐる猫の眼のやうに日に幾度となく變る奴を相手に働いたんだからなア、いはゆる犬骨を折つて鷹の餌食さ」

「已むを得ないよ、舉國一致の熱狂で、日清日露の大戦争に不具

者となつた廢兵さへ、もはや再び涙で見返るものがなくなつたからねエ、まだ我々が五體の満足だけ饒倅だ」

「饒倅ついでに、どツか、この身體の面白い置き場所がないだらうか、我身ながら實に持て餘して來たよ」

「もう君、かうなつた以上、面白い置き場所はないね、たゞ面白い捨て場所を探さ」

「なるほど、置き場所でない捨て場所だ」

「ま待てよ、まてよ君」

「どツか、あるかい」

「ある、ある、大ありだ、あゝ天いまだ我々を捨てずだよ、

あるせ、あるせ」

「どい何處にある」

「あゝ君、此ごろ喧しい婦人俱樂部、あれだ」

「婦人倶楽部、あれが、どうして」

「どうして君、凡そ今日の天下、あゝいふ面白い捨て場所があるもンかね、鏝一文もなく金氣は切れたが、まだ僕も智恵だけは少々、残ってるなア、は、は、は、つまり君、あの婦人倶楽部といふ奴ア婦人の権能を發揮するといふ旗幟の下に、世の中の男子を相手取つて戦ひを開いたんだからね、我々の主義からいへば、社會の秩序を破壊し家庭を攪亂する悪魔の巢窟だ、しかし敵が敵で、女といふだけに却つて男の方は思ひ切つた事は出来ないよ、どうしても君、妙な工合で力一ぱいに組めないよ、その思ひ切つた事の出来ない力一ぱい組めないところが即ち彼等の最も得意で、最も執念深く、ぶら／＼しく附け込んで来るところだせ、ね、うか／＼すると君、こりやア案外、男の方が危い、油断すると君、やられるぞ」

「なるほど、その點が大に、あるね、寧ろ快潤な男と違つて、女の世間かまはず自棄になつて来た勢ひは、どうにも手が著けられンよ、第一また女といふ奴ア堪忍力が強いよ、ばつと眼に起つ活動は無効だが、ねち／＼と水飴のやうに、ねばりついて来る力は恐ろしいからね、なるほど、うか／＼すると危い」

「そこだ、君、そこだよ、その手で来られると男は弱いからね、まゐるからね、そこで我々のやうな、もう世の中に用のない破れかぶれの男が二三疋、必要だ」

「どうする」

「面倒だ、敵の大將分になつて女を二人三人、とツちめてやるのさ、いくら騒いでも威張つても敵の最も缺けてるものは君、腕力だらう」

「愉快、あもしろ」

「今いふ通り相手が女といふだけに却って男の方に思ひ切つた藝をするものアないからね、そこへ我々が飛び込んで、遺憾なく腕力を振ってやるんだ、大した事は仕なくつても、腕の一本か腕の一本、ぶっくじいてやれば宜い、もし濫ッ皮の剝けた奴でもありやア二度と再び男の前へ面の出せないやう、眼鼻を叩き潰してやるのさ」

「たまらないね」

「はした女郎を相手に無理心中する奴さへあるぢやアないか、それから見やア、いやしくも天下の男子を敵に取つて戦はうといふ女軍の一團隊を相手に古今未曾有の大心中を君、やらかすんだせ、まかり間違つて二三人の息の根を止めたところで我々の死刑、さらに悔ゆるところなしだ、此ま、面白くもない世の中に生きて居て運わるく行倒れでもすりやア區役所の假埋葬だ、

寧ろ社會のため人生の衝突問題に一死を賭して働かうぢやないか、いたるところ冷遇された結果を下宿屋に叩き出されるよりやア氣が利いてるせ」

「や、決心、決心、いよく決心だ」

「天下の男子をして随喜渴仰せしむるに足る藝だ、斷然、君、やらう」

「どうせ今まで女に惚れられた事アなし、義理も人情もないからなア、は、は、は、」

「實は多少の復讐心も交つてらアね、は、は、は、」

「しかし武器は何だ」

「高が女だ、ステツキで澤山だよ、まさか取ッ組むやうな事アあるまいよ」

「もし取ッ組んだ拍子に面でも引ッ搔かれちやア見苦しいせ、女

「といふ奴、爪が利くからね」

「馬鹿アいふな、はゝゝゝ」

「さア飲まう君、いよゝゝさういふ面白い身體の捨て場所が出来たとすりやア、落城の水盃でない、出陣の祝ひ酒だ、大に飲まう」

「大に飲めるかい、もう瓶の底だ」

「困ったなア、よし、僕の羽織を飛ばさう」

「飛ばせ飛ばせ、身體にも羽が生えて飛ぶやうな氣のする時だ、一升、やツつけろ」

前には新聞記者の妻として反間苦肉の計を施さむとするものあり、今また言論の自由を以て戦ふべき文明の今日かゝる徒輩ありて、生命しらずに飛び込まむとす、婦人倶楽部に取つては實に意外の大敵なり、

其十五

いはゆる藝術家の藝にあらずして、世間たゞ一口に手軽く藝人といふ、その藝を以て世を渡る男四五人、加之も野太鼓と落語家の前座、狸と鹿の末輩こゝに落ち合せて、やはり互に君と僕との名稱を用ゐながら、

「どうです君、此ごろの不景氣は、かう霜枯つゞきぢやア逆も遣り切れない、しみくと身に沁み渡るからね」

「不景氣も不景氣だが、一方また騒ぎも騒ぎだね、物騒な世の中

になつたよ」

「それで猶更ら不景氣が増すのさ、お座敷や高座ア兎も角、どこへ出かけても近ごろア、うまく御機嫌伺ひにならないぜ、わるくすると御機嫌損じばかりだ」

「全くだ、旦那の氣に入りやア奥方が膨れるしね、雌の方へ取込めば雄の方が物にならずで、彼等を立てれば此方が立たず、中に氣を揉む身の辛さだ、は、は、は、かういふ時に、藝人は苦しいねエ」

「笑ツちやア居れねエよ」

「泣いたツて始まらないねエ」

「泣いても笑ツても、おツ付かねエとは此こツた、どうか早く納めたいもんだよ」

「天下泰平の御祈禱でもするかね、あまり亂世に用のない我々だ」

「からなア」

「また何だツて野暮な騒動をするんだらう、どツちが勝ツても負けても宜いぢやアないか、勝ツた女が男になれるでもなし、負けた男が孕むでもなしさ、交情よくすればするやうに出来て居ながら、喧嘩するたア、わからねエ人達だ」

「なアに、たまには喧嘩も宜いが、ちよいと我々の仲裁で洒落半分に分伸直りの御祝儀と来ねエ喧嘩だからな、聊か念が入り過ぎてるよ、しかし此まゝ見物して居ても、智恵のないこツた、仲裁は出来なくツても祝儀の方だけ、何とか貰へる工夫は無からうか」

「そこへ氣が着くとは、流石に君だよ」

「流石の君も其後が出ない、工夫の種切れだ」

「あとは考へ中と仕て置くさ、は、は、は」

「いや、拙者に神算鬼謀がある」

「あるウ」

「あるとも、仲間の軍師に其くらゐの考へがなくツて、どうする」  
「聞いた上で譽めようぢやないか」

「さういふ吝な料簡だから萬事に無効だ、錢は勿論、手に入るこ  
ツちやアなし、口で譽めるぐらゐ氣持よく先に拂ツて置くも  
だ、こりやア實のところ張り扇の方で、我々の畑でないがね、  
洞が峠を極め込込んだよ、筒井順慶、旗色を見て動くより外ア  
ないね、をかしく慌て、諸共の敗軍は叶はないよ、いくら卑怯  
でも無器用でも、かういふ時は二股膏藥に限るせ、あまり一方  
へ伶俐ぶツて忠義ぶツて、はッさり仕過ぎちやア後の動きが取  
れねエ、まして藝人は愛嬌稼業だ、どツち付かずのところか  
いよ、喧嘩は御勝手、男子倶楽部も婦人倶楽部も一列一體の客

様と見るのが本當だぜ」

「なるほど、一理はあるがね、折角の軍師まだ若輩だよ、乳臭い  
匂ひがするよ、そも、この戦さが何時まで續くか、いつ治ま  
るか知れねエ其間、洞が峠へ陣を構へて居れるかね、馬武器も  
第一に兵糧が盡きるせ兵糧が、洞が峠も宜いが峠の餓死は感心  
しないよ、ところで僕は考へたね、こりやア我々の仲間を  
引くんだ」

「鬮を引いて、どうする」

「男女兩方の鬮引だよ、男の鬮に當つた奴ア今のうち天晴れ、う  
い奴となツて旦那の方へ取り入るんだ、ね、また女の鬮に當つ  
た奴ア隙さず御臺所へ食ひ込んで置くんだ、ね、さうして置い  
て戦ひの濟んだ後の御褒美は山分け、どツちが取ツても貰ツて  
も山分とは名案だらう、智慧も絞れば出るもんだねエ、我々が

ら妙、妙」

「さのみ妙でもないが、時に取つての工夫だよ、戦ひの最中も遊ばず銭になつて、また濟んだ後で山分と來るんだからね、これに極めようぢアないか」

「極つたとすれば、女の方へ行きたいね、平生は兎も角、狂氣じみた時は女の方が出すせ、おまけに忠義振が宜くつて戦さが勝つたとなれば、それこそ占めたもんだ、女の鬨、女の鬨、さんざ野郎殿に手荒く追ひ使はれて、もし負けたとなれば、眼も當てられねエ」

「注文通りに、うまゝ鬨が引けるもんから」

「引けても引けなくつても、僕は女に向つて戦さは嫌だ、生涯それを根に持つて怨まれちやア現世に生きてる甲斐がな」  
「さういへば鬨引を省くせ」

「鬨引を省いて山分だけに這入りたい」

男女兩俱樂部の間一髪に迫りし戦雲は、うき世の風を巻き雨を呼んで、夢のやうなる人間の頭上にまで、響き渡りぬ、

其十六

もし魔の神ありて、もし魔の會するところありて、もし魔の神が何をか呪はむとする時の物凄さは、夜更け人定まりて陰々たる闇黒、四方たゞ閃として森々たる鬼氣、かの藤原秀子が婦人俱樂部の奥深き祕密室に三人の腹心を集めて聲を潜めながら私語ける物凄さにも

似たるべし、この秘密室に藤原秀子と三四人の私語ける聲は、天下幾千萬の男子さらに一人の知るものなく、たゞ或時機と或場合に於て何等かの上に現はるゝのみ、

「わかりましたか、いよいよとなれば今お話し仕た事が第一に最も大切で、また最も秘密中の秘密ですから、たとひ味方の人達にも決して覺られないよう、わけて此際は内外に細心の御注意を願ひますよ、もし此一事が其實行以前に漏れたとすれば、貴女方と私の外に、漏らしたものが無い筈でせう、のみならず折角こゝまで組み立てた總ての計畫が悉く破れる基ですから、この秘密に與つて、この基を守る貴女方は、この倶楽部に對する生殺與奪の權を把つて居ると同じ事です、よろしいか、たゞの幹部員とは違ひますよ、わかりましたか」

「逆も私どもに、それほど力は御坐いませんか、今お話し下さいました一事は、よく承知いたしました、いかなる事がありましても、誓つて秘密を守ります、その外、なほ何か、お差圖が御坐いますれば」

「いえ別段、その外には今お話ししたほどの大切な秘密はありません、しかし敵の方も既に十分の用意が整うて、たゞ頻に此方の動くのを待つて居るといふ時ですから、いつ何時、不意に衝突を始めるかも知れません、ついでには、いよいよとなつた場合に、敵よりも寧ろ味方の内で第一に油断の出來ないのは、我會員中に子のある母ですよ、いかに意志は堅固でも、いざといふ曉、夫婦間に於ける子といふものは、實に怖るべき勢力を持つて居りますからね、また第二に注意すべきは良人の地位と名望と財産のある妻です、かゝる會員は實際に臨んで、あくまで力

にする事は出来ません、第三に注意すべきは新聞雑誌その他の  
 社會勢力に直接の關係ある家庭から来た人です、どうかすると  
 秘密は此會員から漏れる恐れがあります、真正面の敵に當る總  
 ての作戦計畫は、及ばずながら藤原秀子が引受けて任じますか  
 ら、貴女方三人は、なるべく内を取締つて味方の一致協力を缺  
 かないよう、また外の火を防ぐよりも過つて自火を出さないよ  
 う、専心それを願ひませう、その他の事は他の幹部員で、あの  
 〱分業的にすれば澤山です」

「全く、闇に閉ぢられて居た幾世紀の舊習を破つて、新に我々婦  
 人界の光明となる理由ですから、考へて見ると實に責任の重大  
 な事で、なか／＼ラツかりとしては居られません」

「この藤原秀子から見た婦人倶楽部の精神といふものは、今まで  
 男子の犠牲物であつた婦人が、社會の進歩に手を引かれ人類の

發達に身を起されて、自覺した結果、今度は婦人みづから婦人  
 の神聖を保つがために其神聖の犠牲物となる理由です、いはゞ  
 今まで餘儀なく他人に預けてあつたものを新に取返す理由です  
 から、これを返さないといふ男子の方に立派な罪があります、  
 我々婦人の神聖に對する横領罪ですよ」

「婦人の神聖に對する横領罪、ほ／＼、始めて承りましたが、  
 いかにも、さび／＼として痛快な御言葉で御坐います事、意味  
 は存じて居つても私ども、さういふ警句は、迎も出ません」  
 「始めは詐僞で奪うて其後は横領です、その詐僞と横領罪とを人  
 道の上に訴へて、是非とも取戻さねばなりませんよ、つまり今  
 度の戦ひは取戻すに就ての方法で、まづ訴訟の手續きとでもい  
 ふ事になりませう、さしづめ私と貴女方は原告の總代で、満天  
 下の男子は悉く被告です、もし法廷を開いた上は、裁判確定ま

「で必ず未決監に投せらるべき筈ですよ、ほゝゝゝ」  
 深更の秘密室に藤原秀子が皺枯れたる聲を忍びて、さも心地よげに、  
 ほゝと笑ひし老の面には、却って一種の怖ろしき色を浮べぬ、

その後の男子倶楽部また既に戦闘準備を整へて、さア来い來れといふ勢ひ、今は只これ敵の動くを待つのみ、

幹事長の田口雄太郎は敵のために十餘年來の妻を去り家庭を破壊されしのみか、最も敵の目標とせられたる事實の總大將、これに従ふ六人の参謀いづれも亦これ一家攪亂の恨み骨髓に徹せるもの、おのゝテীবルを圍んで人しれぬ秘密會議、

「もう始めさうなもんだが、なかゝ持重してる工合ですな、藤

原の婆、どうしたか」

「この様子ぢやア寧ろ此方から進んで戦端を開いた方がよくはありませんか、いはゆる機先を制する上からも」

「いや、忍び難きところを今日まで忍んで来て、こゝ一刹那といふ間に急ぐのは策の得たものでない、機先を制するは別の方面にあつて、まづ敵の仕かけを待つのが第一でせう」

「しかし敵も私の動くを待ち我また敵の動くを待つて居ちやア、たゞ睨み合ひばかりで殆ど際限がない、敵を討つこと一日早ければ社會を益すること一日早いといふ戦ひです、もはや躊躇する時でない、骨鳴り肉動けり、大に進んで開戦開戦」

「こゝまで戦闘準備を整へて、こゝまで味方の歩調を一致した以上、まさか敗るゝ恐れもありませんが、よほど機を見て動かねばならない敵ですせ、もし一歩を過れば天下の婦人に笑はれ

天下の男子に向うて申譯のない戦ひですからなア」

「兎も角も幹事長の御意見を聞かう」  
田口雄太郎、暫く無言に閉ぢし眼を開いて、悠々と迫らざる態度に微笑を浮べしは、胸中の成算歴々、既に成れるが如し、

「こゝは他に漏れる恐れがないから、總て露骨に打明けますがね、實は数日以前まで、もし敵が向うて来れば何時でも、これに應じて戦ふだけの決心はありましたが、いまだ其決心に對する必勝の保證は出来て居ませんでしたよ、いはゞ危いこつてすな、ところが幸ひ、兼て計畫して置いた準備は遺憾なく著々と一時に好結果を得て来て、もはや大丈夫です、もう十分です、これまで諸君に幾度か促されて、實に苦しかったです、苦しかったですが自分の苦しいために全局に確信のない事は行へない、明日、あらためて具體的に記したものを御覧に入れるが、まづ試みに今そ

の一例を擧ぐれば、第一に都下の新聞雑誌は十中の八九まで確に安心の出来る味方です、また最も中央の便利を選びし一區に一個所、若くば二三個所づゝの公開演説場も手も入れて置きました、また或有力者を説いて、いざといふ曉は機敏の行動を缺かざるため三臺の自働車を戦闘中、無代價で倶楽部の常用に借入れの約束も出来ました、また遊軍として相當の地位財産ある紳士の熱誠家百三十八人の一團隊も組織して置きました、この團隊は一人の力で通常會員の五六百人乃至百人に當るものと見て宜し、さらに一種の突貫を意味せる進撃の武器として田口雄太郎が聊か諸君に誇りたいのは何でせう、はゝゝ、これだけは流石の諸君も、ちよいと考へが付きませう、まして敵は猶更ら驚くでせう、いや、驚くよりも寧ろ馬鹿馬鹿しく思つて呆れるでせうが、その馬鹿馬鹿しいところが即ち武器で、活動寫

真です」

「活動寫真」

「活動寫真が武器になりませんか」

「なりません、實は今度の戦ひに就て田口雄太郎この活動寫真に殆ど財産の全部を投じ更に親友から三萬圓の不足を借金しましたよ、は、は、は、つまり活動の寫真館を四個所、六個月間の契約で既に借入れ、一切これに要する總ての必要は或一部の俳優十七人の準備まで悉く整へました、この活動は男子俱樂部より無代の觀覽券を市中へ撒き散らして、良人に對する妻の不貞なるところ、男に對する女の無禮なるところ、其他あらゆる婦人の缺點と罪惡とを間斷なく遺憾なく日々夜々に寫し出だしていちいち具に面白く攻撃の説明をさせるのですが、諸君、どうですか、いかに馬鹿馬鹿しくとも卑近でも、こりやア案外に效能があり

ますせ、は、は、は、もし幸ひ敵の行動がヒルムに入れば猶更ら以て痛快だ」

六人の參謀、おもはず我を忘れて小兒の如く踊り廻れば、ますます奇策縦横の田口雄太郎、俄に兩手を挙げながら、

「諸君、まだ踊るのは早い、早い、活動寫真の外に田口雄太郎、も一つ面白い痛快なものがある、しかしこれは秘密中の秘密、静に、静に」

其十七

男女の兩俱樂部、いよ／＼こゝに開戦の形式は、まづ社會の耳目たる都下の新聞記者を各社一二人づゝ四十三人に對うて、感慙なる晩餐を供せし席上、婦人俱樂部の代表者として藤原秀子の挨拶これ直に砲火を開きし事となりぬ、

人生の一大問題、各社おの／＼相警めて今日まで筆を慎み、世間の喧々囂々たるに拘らず、たゞ單に通信的の報導以外、いまだ一片の批評論議を掲げざりしが、いよ／＼これまた争うて明日の紙上より論壇の花と咲くべし、

藤原秀子の挨拶を兼ねし演説の大要、

「御繁忙中、わざわざ御光來の榮を賜はりました有難う存じます、

婦人俱樂部全會員を代表いたしまして、こゝに藤原秀子、お禮かた／＼一應の御挨拶を申し上げます、兼て御承知の通り我々婦人の一團は、決して天下の男子方に向ひ、自分の本分と自分の責任を立越えて無理な要求を致すのでは御坐いません、婦人を以て男子の隷屬物とし甚だしきは一種の捕獲物とする或一部の舊思想家からは、今更に驚いて、殆ど社會の秩序を攪亂し家庭の破壊を企てる悪魔のやうに咒はれて居りますが、寧ろ我々は更に健全なる社會の秩序を保持し圓滿なる家庭の幸福を増進せんがため、いはゞ男子方に今日まで、お預けしてあつた我所有物の御返濟を願ふので御坐います、なるほど今までは婦人の教育が不完全で婦人の意志が薄弱で婦人の體質その他の總てに於て、未だ年者に對するが如き意味より、みだりに其所有權を自由に許す事の出来ない點も御坐いますから善意的の保管者と

して、お預り下さったので御坐いませうが、もはや今日では後見者なくとも保管者なくとも自分の所有物を自分で自由に取扱ふだけの事は出来るものと信じて居ります、我々自個を信ずると共に男子方の雅量を信じて居りますから無論、必ず立派に御返済下さるべきものと思つては居りますが、もしや萬一、もし萬々一、これは彼等に返すべきものでない、彼等より預つた覚えがない、よし預つたにもせよ、まだ彼等に返済の時機が早い、なほ暫く此まゝに仕て置かうといふ、方があるやうに考へますから、その方々に向つては勢ひ餘儀なく、要求の手續きを経ねばなりません、どうすれば返して下さるか、どうすれば自分の所有物を取戻せるかといふ、その手續き、その方法を行ふために出来たのが即ち、この婦人倶楽部で御坐います、どうか以上この趣意を御承知下さいまして、寧ろ御観察下さいまして、久

しく闇黒に涙を呑んで居りました我々婦人を一日も早く、明るいところへ御引き出し下さいますやう、只管御願ひ致します、社會に最も高く廣大にして最も清く正しき公平の職責を帯びて居られます皆さんは、決して女子に對する男子方とは思ひません、男女いづれにも與せずして、たゞ人類の自然を判断せらるゝ眞理の使命者と心得て居ります」  
以上これが藤原秀子の挨拶かたぐひ、席上演説の大要、頻に謙遜的口調を帯びて、殆ど泣くが如く乞ふが如く訴ふるが如くなれど、をりゝその間に一種の怪氣焔を伏せて、天下の男子を人臭いとは思はざる大膽さ、いざとならば何物にも怖れざる態度、知らずや我に驚天動地の秘策ありと、さも冷かに笑ひたげの顔色、なるほど平凡の婆でなしとは其席に集まりし新聞記者の批評一致、世間の評判は今後の活動にあり、

男子倶楽部の田口雄太郎、その翌日また開戦の形式として同じ新聞記者を招待せし席上の挨拶は、藤原秀子と比べて頗る興味ある對照を演じ出だしぬ、

「今日、わざわざ諸君を御招待申し上げるほどの事ではありませ  
ンが、婦人倶楽部に對する一種の戦禮上、こゝに一應、清聴を  
煩はし置きます、大體この度の事は我々男子の方から好んで挑  
發したのであります、實は女に胸倉を取られた男の體面と  
して、どうも其まゝ、四垂れて居る譯に行きませんからね、は  
は、ついでに己むを得ず、不意に胸倉を取つて來た其、その理由  
を聞かうとするので、別に大した深い考へも何もありませんよ、

しかし諸君、いふ事があれば女は女らしく静に物をいふべき筈  
でせう、不平があれば不平を、おとなしく演べて、あゝ騒がず  
に談話の出来る事です、それを彼等、だしぬけの胸倉主義は實  
に言語道斷の沙汰で、けしからんぢやありませんか、彼等の  
ため人生いかなる不幸を來すか、既に來したか、現に來しつゝ、  
あるか、その證據は別に示す方法も手段もありませし、彼等ま  
た何等かの方法と手段を取つて來ませうから、今後それに就て  
の一切は、こゝに申し上げる必要もない、たゞ事の起りは我々  
男子よりでなく、お向う様から不意に喧嘩を賣つて來られたと  
いふ事實だけ、まづ社會の耳目たる諸君の頭腦へ入れて置いて  
戴きたい、拙者は敢て議論がましい事を今こゝで演べません、  
また學者臭い講釈も仕ません、また仕たところで諸君に對して  
は所謂釋迦に説法だ、寧ろ教を乞ふべき等の拙者が生意氣な

事は申しませんが、たゞ一言、最も簡単に、最も卑近の實例として、婦人倶楽部の會員なるものは現在將來ともに男子の保護を放れ男子の援助を辭して悉く立派に生存し得るや、否やといふ點に最後の解決を固く信じて居ります、彼等の生育、彼等の教育、彼等の存在、つまり今日までの彼等は全體、何物の寄與に依つて保ち得たかといふ事は、男子の方にも實は相應の必要があつたのですから、こゝで男らしく棒を引いて帳消しにするとしても、彼等が今後の生活上、どうするか、どうなるか、それが心配で、寧ろ哀れでなりません、彼等の理想通りに行はれる世の中は遙の前途、いかに長足の進歩しても、まづ幾百年の後でせう、もし浮世が女のまゝになれば女よりも一步先へ自由になるべき等の我々男子が油断なく間断なく働いて居りますよ、どうです諸君、昔は尻に従へて歩いた女を今日は手を引い

て並んで歩くやうに仕てやつてるぢやありませんか、それを彼等これに満足せず、その上まだ男を掻き退けて前へ出しや張らうとは、あまり圖に乗つて、あまり贅澤すぎて、身の分際を知らざる奴等といはなければなりません、また彼等は男子に向つて何か大切な物を預けてあるやうに騒ぐさうですが、我々男子は女子の方へ遣り放しのまゝ面倒だから捨て、置くものはあります、その女子より半襟一個も預つた覚えはない、覚えのないものを返せとは猶更ら以て言語道断、その潛越無禮の言ひ掛りを懲戒すべき方法手段は、いづれ改めて今後の實行上に御批評を願ひませう」

以上これが田口雄太郎の挨拶かたぐい、席上演説の大要、洒落滑稽を帯びて簡單平易なれど、その間に争ふべからざる人生の事實問題を解決して、加之も恬淡に快澗なるところ、露骨に仔細めかざるところ

ろ、いかにも男子的の意氣と男子的の態度とを表はせりとは、その席上に列せし新聞記者の衆口一致なり、

いよ／＼男女兩俱樂部の戦端は開けたり、いよ／＼社會問題の一大活劇は天下公衆の前に演じ出だせり、  
勝敗いづれに歸するとも、敵味方いづれに傾くとも、あらゆる階級に時ならぬ波動を起し、いたるところの家庭に多少の風雲を兆して、さらぬも不安の念を抱き恐怖の色に襲はれしもの、おもはず聲を揃へて、さア始まつた、さア始まつた、

時の警視總監、男女兩俱樂部より田口雄太郎と藤原秀子の二人を代表者として招き、加之も丁重なる紳士淑女の待遇を以て殆ど懇談的に何事をか一時間餘の警告を與へ、内務大臣また秘書官をして其場に立會はしめ、總監に口を添へて社會組織の大體上より注意を加へしとの報導、その日の夕刊新聞に二號活字にて掲載さるゝや否、滿都また俄に沸返りて、そら來た、そら來た、いよ／＼言論ばかりの戦さでないぞ、やれ／＼、しツかりと遣れ、

我國の歴史上いかなるページを翻しても、戦ひは男子と男子の間に起りしが、今や國內に戦ひの根を絶ちしと共に男子また女子を敵と

して戦はざるべからず、加之も戦ひは勇を以て決するの快なく死を以て名を成すの譽れなく、互に生きて不愉快に朝夕の顔を睨み合ひながら夫婦は家庭の上に戦ひ未婚の男女は交際の上に戦ふ、寧ろ屍を野外に曝すよりも悲痛慘憺なり。

近 刊

現代思潮の衝突を最も大膽に曝露せる男女の戦ひ寧ろ慘憺たる男女の實戦は鼓篇にあり

現代思潮 男女の戦ひ 完

大正二年七月十五日印刷  
大正二年七月十五日發行

不許複製

定價金九十五錢

現代 男女の戦ひ 思潮

著者 發行者 印刷者 發行所

村上信 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地  
加島虎吉 東京市京橋區日吉町十番地  
波邊爲藏 東京市日本橋區本石町三丁目  
至誠堂書店 電話東京三六六六番  
東京市日本橋區形町通住吉町  
至誠堂小賣部 電話花一九四九番  
電話東京一九八四二番



(定認御會查調書圖育教俗通省部文)

# 明治聖代絶好の記念

國民新聞記者 坂本辰之助先生謹記

## 明治天皇

御聖影○御宸筆  
御製歌集○御詔  
勅○御年譜○御  
聖歷○涙痕日記  
○御逸事○其他  
光澤寫眞○コ  
イブ刷數十種入

本書は皇室皇族の事に精通せる坂本辰之助先生が警戒沐浴し熱涙を噴みて謹記し奉れるもの出處正確にして寸毫苟もせず先帝の御聖徳に關する事は細大網羅せざるなし實に聖代無かるべからざる完全なる大名著書に當り六千萬の國民戸々に一本を贈して明治聖代の絶好記念とせざるべからざるのみならず一種の定本として世界萬國の讀書者をして一般に聖徳を仰がしむべき光輝ある永久傳家の寶典也

國民新聞記者 坂本辰之助先生謹撰

## 明治御大喪記

東京并に桃山の  
御大葬列御寫眞  
は御大葬御寫眞  
寫團體技術の備  
ストを悉して撮  
影せしもの全部  
アイトベの光  
澤記念寫眞及び  
挿畫百六十五個

先帝御不豫御發表後宮中の混雜●二重橋前其他各地に於ける赤子熱病の光景●崩御當夜の光景●廣宮御通夜日記●靈柩奉移式の光景●御大葬の顛末●桃山御陵の光景●最も精細な極む本書を一讀せば實景眼前に覺醒して實地を見ざる人も詳細に其光景に接するを得べく永世子孫に傳ふべき唯一の御大喪實記たり

●東京市役所各縣廳役場學校團體の註文  
今尙續出す

菊判特製天金美本 特價金壹圓五拾錢  
箱入製本堅牢莊重 郵税(内地)金拾貳錢  
定價金貳圓 郵税(清鮮)金貳拾錢

發兌

東京市

至誠

電話本局三六六番

振替東京一七四四番

熊田葦城先生著 川村清雄畫伯裝幀

## 日本史蹟 大阪陣

當代獨得の地理的活歴史

徳川家康が難攻不落の大阪城を陥るや計畫慘憺を極め作戦苦心を盡す今古此の辛辣の戦なく東西此の悲惨の史なし本編は地理と歴史とを融和する熊田先生獨得の快筆を揮つて其の終始曲折を描寫す英雄の面目躍動し勇將猛士の苦衷活躍す殊に一々地理を精査して正確なる史實を湊合す三百年前の活歴史なると共に大阪に遊ぶものゝ必携必讀の好案内記なり

澁川玄耳先生著 中村不折畫伯裝幀

## 一萬金

四六判特製全壹冊  
紙數二百八十五頁  
定價金八拾五錢  
郵税金八錢

本書は新聞界の泰斗たる東京朝日新聞社に在つて名聲噴々たりし澁川玄耳氏が去月俄然其の職を抛つて支那漫遊に上りたる前後の詳細なる日記なり進退出處は男子の最も難しとする所此間に處して此の新聞界の彗星は如何なる舉措に出でたるか本書を讀む者或は嘔ひ或は憐み或は喜び或は憤り遂に流涕長嘆を感せずんば已まざらんとす著者の奇文奇想は世既に定評あり而かも本書は其の心血を凝げるものにして特に此の種の大膽なる著述は天下未だ之れ有らざる所此の放膽にして破天荒なる大著述を續け!

發兌

東京市

至誠

電話本局三六六番  
振替東京一七四四番

新譯漢文叢書第一編

大町桂月先生評評  
全貳拾貳卷縮刷全壹冊  
紙數壹千貳百頁

精珍總クロース美本  
定價金壹圓五拾錢

特郵 價金 稅 拾貳圓

本書は近世の偉人近代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓抜筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を睹るが如く大義爲めに明かに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文叙事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇抜痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯されて桂月先生獨得の妙を極む觀察殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自から寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編

陸軍教授  
友田宜剛先生評解  
全七卷縮刷全壹冊  
紙數壹千壹百頁

本文新式ゴシック活字  
袖珍三五形携帯至便

正郵 價金 稅 拾圓

作文に志す人は必ず文章軌範を讀まざるべからず明治作文教授の泰斗友田宜剛先生が十年の心血を凝ぎたる研鑽の光燦爛として新譯評解文章軌範は世に出てたり其の譯其の評其の解其の評最も適切優に明治文章の模範化したる點に於ては比類無き無限の光榮を擔へり今其の特長を一言せんか●從來の漢文讀みの通弊たる文法の誤りに深く注意し假名一字をも疎略にせず本文を離れずして而も純粹の明治的文章化せしめたる事其一也●各文の始めに作者の尊傳解題大意等を附し讀者をして興味津津喜んでその文を迎へしむること其二也●各節各段に丁寧懇切なる語釋通解文法を附し難語を解せしめ殊に通解は口語文及び談話演說の模範たらしめ切實に各篇末に附したる總評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法により切實に作文法を教へたる事其三也●更に上欄には本文を掲げて對讀に便し且之れにも古賢の興味深き評語を網羅し讀者の趣味を喚起する事其の五也●以上の特色を具備する本書は蓋し類書中の白眉と云ふ可し

新譯漢文叢書第三編

濱野知三郎先生註釋  
全十四卷縮刷全壹冊  
紙數八百頁

本文新式ゴシック活字  
袖珍三五形携帯至便

正郵 價金 稅 拾九圓

●讀賣新聞評 孟子の全文を和譯して之に註釋を附し上欄には其本文を掲げ巻末には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直に其全文を求め得るの便に供したり……其和譯の正當なる註釋の體健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきものなれば青年子弟の讀物としては最も現代に適切のものなるべく就中著者の苦心と見るべき索引の編纂と排列とに力を用ひ……此國民修養の一大格旨集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず其譯文全體にゴシック文字を用ひポケット形總クロースにて携帯し易し

新譯漢文叢書第四編

大町桂月先生評評  
全壹卷  
紙數三百五十頁

本文新式ゴシック活字  
袖珍三五形携帯至便

正郵 價金 稅 拾五圓

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯せられ、今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず、之を釋し、之を評せらる徹底の見、老熟の筆明快を極めて、渾然として桂月一流の名文となり朗々誦すべく尊王の詩人、又愛國の詩人として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歴史を知るべく、以て士氣を鼓舞すべし。日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん

發兌 東京市本區 橋本三日 至誠堂書店 振替七四一 東京四

發兌 東京市本區 橋本三日 至誠堂書店 振替七四一 東京四

新譯漢文叢書第五編

大町桂月先生評評  
新日本政記  
全八冊編刷全書冊  
紙數六百二十餘頁

袖珍總グロース特製  
三五形箱入頤美本

正郵 價稅 金八 拾 錢

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を説き、後に日本政記を著して朝廷施政の大綱を明にせり。先頃噴飯を極めたる南北朝問題の如きは、翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼れて維新の大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刷して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。見正大、文章雄健、光采陸離として、實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤謬甚だ多し。大町桂月先生茲に之を翻譯せられ、一々精密に誤謬を正し、翻譯の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨特の痛快なる警評を隨所に加へて、筆力雄橫、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目並に一新す。日本國民必ダ一本を備へざる可からず。

新譯漢文叢書第六編

久保天隨先生評評  
新十八史略  
全七卷編刷全書冊  
紙數七百頁

袖珍天金總グロース  
特製箱入頤美本

正郵 價稅 金八 拾 錢

上下五千年、興亡八十餘朝、治亂成敗の跡、必ずその原委を考へ、始終を綜べ、鉅、固せざるなく、細、固せざるなく、紀述その要を得たるものを十八史略となす。その書、從來世に行はれ、家藏戶誦の盛を極めしもの、豈に偶然ならむや。本書は、譯者が特に意を用ゐて、之を時文に翻せしものにして、現代國語の文法に循從し、且つ漢文に特殊なる語勢の緩急を併せ移し、難解の字句には、すべて注脚を施したれば、讀者は、熟語に就いて輕重を感るが如く、容易に、全篇を通覽するを得べく、卷中に挿入せし數百條の評語は、奇警峭拔、その史實と相俟つて、覺えず、案を拍つて快哉を呼ばしむ。加之、篇首には、精細なる解説を載せ、卷末には便利なる新式の索引を添ふ。されば、この書を讀むもの、一は以て容易に東亞ウラン人種の起伏消長を嘗にするを得べく、一は以て漢語攻究の指針となすべく、その裨益、もとより少々ならず。敢て江湖の一讀を勧む。

發兌 東京市本區橋本三丁目 至誠堂書店 振替東京四一七四

新譯漢文叢書第七編

友田宜剛先生評評  
新續文章軌範  
全七卷編刷全書冊  
紙數壹千頁

袖珍總グロース特製  
三五形箱入頤美本

正郵 價稅 金八 拾 錢

續文章軌範は正文文章軌範と相俟つて古今作文書の双璧古人が心血を凝ぎたる千古の名文陸離として光彩を放てり文に忠する者は必ず之を座右に致して日夕に師とし友とすべし當代作文教授の泰斗友田先生刻苦研鑽多年の筆墨を積んで茲に之を完全なる明治の作文模範化せらる

本書の特長

漢文讀方の通弊たる文法の誤に深く注意し本文は新式ゴシック活字振假名附にして難解の字は懇切なる解釋を施し各文の始めには作者略傳を附し篇末には文法と總評と相俟つて和漢の文典東四の修辭法より切實に作文法を教へ上欄に原文を掲げて對讀に便し且之にも古賢の興味深き評語を附記し讀者の興味を喚起せしむ

新譯漢文叢書第八編

大町桂月先生評評  
新國史略  
全五卷編刷全書冊  
紙數九百餘頁

袖珍天金總グロース  
特製箱入頤美本

正郵 價稅 金八 拾 錢

萬世一系の天皇を戴ける神州に産れながら神州の賞を以て知らず三千年金匱無缺の歴史の實質を知らず人心輕快となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せんとするは今の世の大患なり世の歴史教科書は唯歴史の骨組のみありて肉なく血なし歴史教育の宜しきを得ざること其大原因ならずんばならず大町桂月先生茲に撰する所あり先に日本外史日本樂府日本政記を譯され今又國史略を譯する國史略は古來の諸國史の粹を抜き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を關關に創めて篇を樂樂第行幸に結びたるにても作者の精神を感とするに足る廿年前迄は月々にて編せられたりき然るに漢學教育衰へて此其著も空しく閑却されんとす今大町先生之を譯し之を評して有益なる貴重なる國史略並に復活す

發兌 東京市本區橋本三丁目 至誠堂書店 振替東京四一七四







澤野男爵閣下序 用村齋伯  
澤川忠雄先生著 表裝裝訂  
○愛子 父の書簡  
菊版總タロース美裝

定價 郵稅  
金一圓 十錢  
金二圓 十錢

目 次  
第一信品性の偉大なる勢力、第二常識の修養、第三日常談話の要訣、  
第四書簡の認め方、第五筆蹟の修養、第六金銀使用の死法、  
第七儀容の整理、第八世態人情の機微、第九四角の作法、第十書簡  
生活の効果、第十一樂天思想の眞價、第十二休養の重大、第十三外  
國語學研究の活法、第十四實務處世の眞髓、第十五健全なる意志の  
修養、第十六人生の幸福に達する道

澤川忠雄先生補譯

○交際 なかれ

袖珍美本  
ダイヤモンド

定價 郵稅  
金五圓 十錢  
金四圓 十錢

「なかれ」は 日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗練的文章を以て記述した  
れば此の書を伴ふれば交際上の失敗を避くべし  
大人が讀んでも有益なるのみならず青年學生及び婦女が讀  
んでも其の益に缺くべからざる交際學の至宝なり  
洋食の食べ方洋服着用の注意交際談話法に至るまで最新なる  
二十世紀のスタイルを欲する紳士淑女の眞師友なり  
日新文壇の士田夫の差は「なかれ」を讀むと否とにて定まる  
最新式の意匠を備へたるボケツト機軸の袖珍美本なれば汽車  
電車の中にて暇ある毎に選讀せば其利益は計り難し

澤川忠雄先生著

○交際と應對

菊版上製 全一冊

定價 郵稅  
金五圓 十錢  
金六圓 十錢

學問伎倆共に勝れながら處世上失敗するは交際應對の拙劣に因るのみ本書  
は著者が多年の實踐に盡して青年諸君のために交際應對の根本を提へて領  
才を發揮する工夫快活心の表示人情に投ずるの呼吸愛嬌をなすの用意人心  
看破の道等十五章に分ちて詳細に説明せるものにて此一冊を熟讀して活用  
せば他人の感情を害し交際と應對とに於て失敗するなきが故に以て處世上  
の成功者たらん者は必ず再讀すべし

澤川忠雄先生著

○談話術修養

菊版特製 全一冊

定價 郵稅  
金四圓 十錢  
金五圓 十錢

本書は著者獨特の創見に基づき其輕妙流暢なる才筆を呵して談話に關する有  
ゆる注意及び談話術の要訣を説明せるものにして加ふるに著者の博學多識  
なる歐米最新の流行なる斯術の語法を加味折衷して錦上添花を添へたり人生  
成敗の基く所が大規模の計畫を察しあらずして却て尤も卑近と見做したる  
談話に因るを思へば斯術の完備を計るは一生の大事たるを知るべし本書は  
此重大の談話修養に關する唯一のオーソリティーにして幸福成功の福音は此  
一卷を活用するに因りて必ず期すべきなり速に一讀せられよ

澤川忠雄先生著

○修養と人物

菊版特製 全一冊

定價 郵稅  
金五圓 十錢  
金六圓 十錢

是れ著者獨特の人物養成論也修養を積むて忘らざれば何人も有爲の人物た  
るに至るべしとの見地よりして現今青年の尤も要求する所を擧げ或は其訣  
略とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其明快の筆法を  
以て縱横無盡に論破せられたるものにして全篇雄偉大豪宕の氣流を一讀痛快  
淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志ある青年諸君は本書に就  
て斬新有益の智識を享受せられよ

澤川忠雄先生著

○勤儉の實踐

菊判 全一冊

定價 郵稅  
金五圓 十錢  
金六圓 十錢

奢侈輕佻の風一世を風靡し人々虚榮に耽り上下競うて此惡弊に辭ふは今代  
社會の一大缺陥にあらずや著者深く之を慨し其痛快極大の筆を揮つて慎重  
の態度懇切の用意を以て世人に一大警告を與ふ其勤儉を説き貯蓄を唱ふる  
見識は世上の陳腐なる勤儉論とは全然違ふ異にし最も文明的見地の上より  
之を道破して一々適切一度本書を取つて之を熟讀せば奢侈浪費の徒も驕然  
として其非を悔い勤儉力行の念勃々として起るべし

米國 カイネギ 翁近著  
日本 澤野男爵閣下序文

○勤儉の教訓

日本 山崎梅處先生譯

定價 郵稅  
金六圓 十錢  
金八圓 十錢

●翁の一代は目醒しき激動奮闘の記録なり翁先に閉地に退き顧みて其尊き  
實験を叙す字々至誠を凝めたる一大教訓●今や社會經濟家庭處世上の難問  
題百出して青年を悩めず翁之が解決の鐵案として勤儉の徳を説く事痛切職  
見卓越●翁は何故私財四億圓を寄與せんとせしか  
本書は翁の此意氣を説明して遺憾なし附録カイネギ 翁  
傳面目躍如たり

澤川忠雄先生著

○克己座右銘

袖珍 全一冊

定價 郵稅  
金貳圓 十錢  
金拾圓 十錢

刻下大 奮闘力の衰弱せる人は宜しく本書を讀め  
意氣地なき男子は速に活路を求めよ  
煩悶の絶えざる婦女は早く讀め  
貯蓄の困難あるものは直に之を見よ  
立身の運きを敵する人は速に悟る所あれ  
失敗の原因の不明は怒ら明白とならん  
憤怒し易き人も和氣洋々の人と成るべし  
斯く日々發生する  
緊急問題は克己力  
の足らざるに因つ  
て生ずるに此克  
己力は僅に此の一  
小冊子を誦讀せば  
直に獲得せらるべし

東京 東區 本町三丁目 至誠堂書店 發兌

東京 東區 本町三丁目 至誠堂書店 發兌

東京 東區 本町三丁目 至誠堂書店 發兌

小松原文部大臣閣下題字 (五版)  
樂翁公眞筆  
○天白河樂翁 編前  
碧瑠璃園著 齋藤松洲君裝幀  
川村清雄君裝幀

東京朝日曰く、儉約、力行、慈悲、正義の權化たるかを疑はしむる樂翁公生涯の面目は神彩ある筆端に突々として現はる家庭の讀物として生ける教訓を與ふべく其の華肖の人たりしたために華族の子弟に讀ませて大なる感化あるべし鑄釘の麗美なる事近來の隨一也讀賣曰く、家庭に於ける歴史の讀物として上乘の第一なるべし

平田内務大臣閣下題字 (再版)  
樂翁公眞筆  
○天白河樂翁 編後  
碧瑠璃園著 齋藤松洲君裝幀  
川村清雄君裝幀

實業之世界評：鑄釘の美を以て出版界を驚かしたる忠孝小説叢書白河樂翁：前篇後篇と併せて社會の歡迎を受くる事疑なし現時の文壇一方に平民文學興起の傾向あれば一方に斯くの如き貴族的權力者の文學漸く流をなさんとす注目すべき現象と云ふ可し▲新小説曰く家庭に於ける婦女の團圓にも男が一夕の讀物としても吾人は如是の小説を大方に薦む

前宮内大臣土方元伯題字  
福密顧問官黒田清綱子題字  
○史傳 高山彦九郎 編前  
碧瑠璃園著 川村清雄君裝幀

王政復古の主唱者亦忠孝節義の權化なる高山彦九郎が一代の事業、人格、勤王の眞面目は現代第一流の史傳小説家碧瑠璃園先生が獨特の妙筆に依りて活躍す、もし夫れ彼が最後の悲劇に至りては讀むもの必ず肉動き騒々くの慨あらん

香泉浪人著 關田牛古齋伯口授  
齋藤松洲君裝幀  
○史傳 後藤又兵衛 編前  
碧瑠璃園著 川村清雄君裝幀

一代の豪傑を極めし桃山の春は夢の如く消えて天下盡く其遺恩を捨て、強者たる關東の旗下に阿諛するの時其の最後の結果を豫期しつゝも弱者たる豊家を佐けて士道に殉じたる後藤又兵衛が千變萬化其半生の大活劇は捕へて本書中にあり爽快絶頂夫をして起たしむ

皇后宮御歌上方伯齋藤書  
宮中御歌所主事坂正臣先生題字  
東京神戶院什寶寫眞數葉入  
○家庭讀本 春日局 編前  
碧瑠璃園著 (紙數四百餘頁)  
川村清雄君裝幀 (紙數四百餘頁)

春日局は千代田城大奥の創始者として又大奥政治の開發者也局が三代將軍の乳人として上りたる前後の事情は從來の小説傳記にも記されたれど幼時の艱難稱業佐渡守を真人とせる事情三人の實母としての局繼子と實子との間に挿まりて苦辛艱難せる局に至りては未だ何人の筆にも上りたる事なし著者茲に見る處ありて局の幼時中年時を詳記し延て晩年時に及ぶ筆致圓熟事情明白家庭の讀物として最も趣味と教訓とに富むもの也

碧瑠璃園著  
川村清雄君裝幀  
○家庭讀本 大石陸女 編前  
第貳篇本  
紙數四百餘頁  
紙版上製美本

義士快擧の裏面史として見る可き者は本書あるのみ夫れ陸女は絶世の忠臣其雄の妻として夫以上の辛酸を嘗めて其事業を成就せしめし著者著者然る眼は早く此點に着眼してよく烈婦が一代の事蹟を縱横に描寫す蓋世の偉丈夫の背後には斯の如き賢婦人あるを明らかにし以て永く婦人の龜鑑とす健全なる家庭の好讀み本なり

小松原文部大臣閣下題字  
樂翁公眞筆  
○偉人 水戸光圀 編前  
菊版特製 全一冊

光圀卿は徳川時代有数の偉人にして勤王家也著者は馬學の別號たる鑄釘翁を自稱せる當代有数の文學家の匿名也其流麗なる詞藻と高雅なる對話との間に知らず識らず光圀卿の人格事蹟を了解せしめて千載の下向此偉人を偲びて傳た欽慕の情に堪へざるものあり本書の特色は其高潔にして健全なる趣味の流露に存すれば家庭の讀物としては勿論廣く社會青年男女の讀物として長く教訓と趣味とを感得せしむる事他に比なし

大町桂月先生序  
原抄期先生著  
○蒲生氏郷 編前  
四六判 全一冊

大町桂月氏序して曰く「才華縱横逸氣奔放覺えず人をして氣昂り情熱せしむ」と著者が滿腔の語地蒲生氏郷なる一英雄を執へ來りて繪横論評文辭燦爛として痛快を極む偉人若くは偉人たらん者は必ず此書に醉睡して其對山倒海の手腕を伸ぶるを要す

發兌 東京市本區橋本三丁目 至誠堂書店 東京市本區橋本三丁目 發兌 東京市本區橋本三丁目 至誠堂書店 東京市本區橋本三丁目

乃木將軍手簡 訂正五版  
牛門隱士著  
○**偉人百話**  
四六版 全一冊  
定價 五十五金  
郵税 六金

大町桂月先生批評  
○**四十七士觀**  
四六版 全一冊  
定價 五十五金  
郵税 六金

德富蘇峰先生手簡  
今井鐵嶺先生編  
○**新時代の修養**  
四六版 全一冊  
定價 五十五金  
郵税 六金

梅雪山山人新著  
川村喬伯表裝 (三版)  
○**修養座右錄**  
袖珍美本  
定價 十六金  
郵税 六金

鎌倉建長寺管長  
菅原曇華師講話  
○**茶話婆言爺語**  
定價 拾六金  
郵税 六金

將軍東郷平八郎閣下題字  
牛門隱士著  
○**續偉人百話**  
四六版 全壹冊  
定價 拾六金  
郵税 六金

大町桂月先生著 (四版)  
○**文藻三百題**  
附作文心得百ヶ條  
四六判 全壹冊  
定價 拾六金  
郵税 六金

大町桂月先生著 (六版)  
○**ちび筆**  
四六判 全壹冊  
定價 拾五金  
郵税 六金

**世評一斑**  
幾知新聞評 淫靡の風漸く盛んに青年の意氣を沈せんとせる今日所謂一種の英雄崇拜を以て青年を奮勵し他日の譽を成さしむるの要は世に志す者の偉しく認むる所なり本書は著者老練の撰述の筆致を以て近代偉人の百話を寫せしもの蓋し青年の讀すべき其再なり二六新聞評 四都府州、大久保、木戸、伊藤等の維新の元勳より乃木桂に至る百餘名の逸話を載り文章簡潔にして悉く冗漫の致なく取村亦正確にして興味津津たり、青年の好讀物たるべし

當代四十七名士が當年の四十七士に就いて感想を陳べたること既に文壇の奇觀なり大町桂月先生が其感想に向つて一々批評を下すに至りて奇愈々奇なり眼孔鋭利筆勢奔放至誠に發して秋毫も狂ぐる所なく感歎服氣熱罵冷笑交もく出で、大綱益々明かに四十七士の忠烈益々輝く四十七士に關する著述として實に空前絶後何人も一讀して快哉を叫ばざるを得ざらむ

**本評**  
大隈伯渡邊子加藤勇牧野男尾崎行雄河野尉中元夏博士 修養座右錄  
山岡中佐林伯鸞澤野男軍野博士松岡康毅目賀田男宮部久 學鏡餘時勢  
松村介石德富蘇峰崎田博士海野政太郎高橋博士山路賢 關して實  
山田田榮吉徳博士高瀬博士佐藤少將二木博士伊藤修二 驗より得來  
龍野鎮守井上勇長子田内相根津一江原素六古賀廉三林 れる活智識  
田輪長三宅博士水野學事官大發發 を稱讃す

從來發刊せし修養の多くは千篇一律にして蓋を模倣せるに過ぎず隨て今日の生存競争時代に應用する能はず爾り本書は此種の著書中にて新新に尤も奇抜の見地より現代青年の必須なる日常處世の心得大膽周到の態度經濟的觀念等賢人の大悟せる大達觀より痛快の斷案を下したるものにして巻末には名家座右訓を付したる等用意周密一讀意氣伸暢無限の新智識と貴重な處世訓を學び得らるゝもの天下に其比なかるべし

本書は著者が陳義初心の門人の爲に時々唇皮を動かして兒を侍んで讀を乞ふ底の者として婆言爺語と云ふも實は唐言梵語の玉條なり然かも親切博愛の慈腸より流出する血滴々の語にして所謂賢弄的詼諧的の著に非ざるは憤慨なる著者自らの斷言する所句々熱血迸り字々清風生ずる底の婆言爺語興味津々又學界初歩者が暗耕雨居の好伴侶たるを失はず

本書は明治中興史の外傳なり臣民の典型を示し偉人烈士の言行世道人心に關する者二百餘件を載り隱士の筆簡潔明快にして痛快淋漓維新前後より現代に時めける名士の風采面目歴々として紙上に活躍し珍談佳話盡く出で、愈々奇に一讀巻を捲ふ能はざらむ

**批評**  
萬朝報評 評山水川三百題行文流暢筆華燦爛として趣味津々  
四季に分つて其見聞感想を叙したり一流の筆致に  
妙味横溢する著者自ら云ふ「文章初歩の手引になさ  
人とするもの」と子弟の以て範と爲すべき最近の  
良書なり (好評噴々以て其聲價の大なるを知る  
べし)

天下一品と稱せらるゝ大町桂月先生の隨筆數十篇を収む高士の佛堂々に躍動して行文流暢平易にして趣味深く逸氣横溢して孤鶴雲表に翔り和氣飄然として春風平野を吹く眞にこれ文の至れる者一讀人をして身の塵世にあるを忘れしむ

大町桂月先生校訂解題

全四十五册  
定價各卅錢  
郵稅各四錢

學 生 文 庫

袖珍特製  
舶來紙刷  
携帶至便

●周到卓拔なる批評的解題は各書の性質糊要價値を詳説す	14	義經記全	13	先哲叢談全	12	益軒十訓中	11	日本外史中	10	常山紀談上	9	心學道話全	8	太平記壹	7	源平盛衰記壹	6	西遊記上	5	會我物語全	4	諸曲全集上	3	益軒十訓上	2	日本外史上	1	南朝史傳全
	28	四書全	27	禪學名著集全	26	續心學道話全	25	日本外史下	24	大岡政談上	23	太閤記壹	22	狂言記全	21	百人一首一夕話全	20	西遊記下	19	諸曲全集中	18	源平盛衰記貳	17	益軒十訓下	16	常山紀談中	15	一休諸國物語全
		以下選定中	41	太平記終	40	太平記四	39	太閤記五	38	太平記三	37	太閤記四	36	諸曲全集下	35	太閤記參	34	源平盛衰記五	33	太平記貳	32	源平盛衰記四	31	太閤記貳	30	源平盛衰記參	29	常山記談下

既刊書目

東京市日本橋區石町三丁目

發兌至誠堂

東京東一七四

329  
180

終